



パリ・オペラ座バレエ『若者と死』ニコラ・ル・リッシュ Photo: Jacques Moatti

ローラン・プティがシャンゼリゼ・バレエに『若者と死』を振り付けたのは1946年、初演者はジャン・バビレとナタリー・フィリップパールでした。ダンサーにとって、若者という役を踊るのはなかなか勇気のいることかもしれません。けれども昨シーズン、イングリッシュ・ナショナル・バレエで若者役を踊った二人は、歴史的な重みにひるむことなく、情熱をもってこの作品にあたりました。

「魅了されたよ！」と語るのは、まだ二十歳にもならない正真正銘の“若者”であるヨーナ・アコスタ。これが初めてのプティへの挑戦でしたが、「何から何まで、好きになりました。五組のキャストのうち初日に選ばれたのも最高だったしね！叔父のカルロス（アコスタ、この役はまだ踊ったことがありません）にくやすい？って聞いたら一笑に付されちゃったけどね。」一方アントン・ルコフキンはマリンスキー劇場時代に『カルメン』の盗賊のひとりを踊っています。YouTubeにもこの作品の映像はたくさんあるので初めはいろいろ観てみようと思ったけれど、初日の数週間前にはそれを止めて自分自身の解釈を見つけようと決心した、と語ります。「誰かの真似をしても、不自然なだけですから。」アコスタも他のダンサーの踊りを観てベストな解釈を探ろうとしましたが、その結果行きついた結論は、「人物造形に集中すること。このバレエで一番大切なのは、若者の人物像を掴み、観客に、芸術家が何を言いたいのか理解してもらおうこと」ですが、若者を自殺へと駆り立てる絶望感はおいそれと表現できない、といいます。

さらにルコフキンは、「とてもやりがいのあるストーリーで、別人になるチャンスだし、だからこそ僕たちは舞台上上がるのだともいえます。若者は暗い時代に自分が何者なのかを知ろうとし、自己を救済しがっているんです。」そしてアコスタは、「持てる限りの能力で挑む役」だとも。プティの独自の振付もチャレンジを伴いますが、「始めのうちは彼のスタイルは難しい。全く知らないステップもいくつかあったけど、新しいものを試すのは楽しいね。」

パリ・オペラ座のニコラ・ル・リッシュが初めてこの役を踊ったのは1992年、まだ第一舞踊手だった時のこと。伝説のジャン・バビレの映像を含めても数えるほどしかこのバレエを観たことがない状態で、当時マルセイユ・バレエでプティのアシスタントを務めていたノルベルト・シュムキから役を習いました。彼にとって、肉体面と

12月号の主な記事: 若者と死

今月号の日本語ページでは、三人の男性ダンサーが語る『若者と死』についてお伝えします。

精神面では、どちらが難しかったのでしょうか？「どうやってこのバレエを自分のものにするかが、一番難しかったですね。それまでも偉大なダンサーが、それぞれの解釈で若者役を踊っていましたからね。誰かの真似をするのではなく、“みんながこうやっていたから”と言われてたとおりに踊るのでもなく、若者が僕自身の中に息づくためにはどうしたらいいか…でもローランとのリハーサルに入ると、とても楽になりました。彼はいつも、自分自身でいながら最大限の努力をしないで、と励ましてくれたんです。それに出来が悪かったら、役を降ろされてしまいますからね！」笑いを交えつつル・リッシュは、さらに続けます。「技術的には、じつは道具類を巧く扱うのが一番厄介だったんです。踊るためのスペースは広くないし、普段の長方形ではなく三角形で、隅にはベッド。こういう条件と闘っても、勝ち目はありません。それに椅子がとても重いのをきちんと計算して扱い、自分の位置を常に把握していないといけません。テーブルやベッドやいくつもの椅子が邪魔して、踊れる場所は本当に限られていますね。」

本番の前にローランとリハーサルしていたとき、テーブルから大きなジュテで跳び下りるところで、素早くできるところを見せようと焦って足を引掛けて、滑り落ちるときに背中の下から上までテーブルの角で擦ってしまったことがありました。本番の舞台上、タバコをうまく消せなかったこともあったんですよ。その後、肩をつけて逆立ちする場面に来たとき、火が点いたまま転がっていたタバコが肩に押しつけられて、ものすごい痛みを感じました。

でも、僕にとって何がこのバレエの一番の思い出かと言えば、ローランのこの言葉。『君はもう、振付を知りぬいている。だから毎晩、それを新しく生み出すんだよ。決してそのまま行くんじゃない。毎晩生み出すんだ。』（訳：長野由紀）



『若者と死』リハーサルでのヨーナ・アコスタ
Photo: E. Kauldhar/Dance Europe